

第七章 地方行脚と農村青年社出版物リスト

一 地方行脚リスト

吾々がかなり頻繁に地方行脚をおこない、同志と直接連絡の方法をとったことは顕著な事実であった。

直接に同志と会うことは、そのこと自身意義があり、惹いて農青イズムについての意見交換により、行脚は有意義である。また、吾々は行脚により地方の実体を知ることができ、そのことは運動上必須の条件である。

以下に、当時、吾々が行なった地方行脚の表を要約してかかげる。

イ、昭和六年二月十五日、長野県上伊那郡富県村（伊沢八十吉）青年会の招請で、岩佐作太郎、小川光生、八木秋子が講師として出席した。（この場合は岩佐、小川は農青社と無関係。）

ロ、昭和六年二月二十二日頃、八木は茨城県新治郡小桜村に岡崎一夫を訪問した。

ハ、昭和六年二月下旬星野・宮崎は名古屋市中区浅野紀美雄・亀井高義、その他の同志を訪問し、二月二十四日、愛知県津島市に真野志岐夫、横井憲蔵（農）、小島一吉（農）と会合した。宮崎は西村という偽名を使った。こうしたことが明瞭になったのは、戦後、真野が名古屋市中区で週刊「自由評論」を発行、それに回想記「農村青年社の信州革命と私」を連載したのを、未亡人（真野は昭和二十九年死去）が、現在にいたるまで保存されていたために、当時のことが明白となり、以下に述べるような当時の会同内容も浮び出るに至ったのである。

このあつまりで、吾々は「黒連が日常闘争を排撃し、独善的な破壊主義にはしたため、暴力団化し、中央集権主義の誤謬に陥り、全国の同志が遊離しつつあること、アナキズム運動が都市の暴力革命のみに主力を集中し、農村運動を閑却したために中央集権的な誤謬をおかしつつある。今後は農村を中心とする自由コンミュン建設運動をまきおこし、民衆の中へではなく、民衆の中からは主旨として、自主分散的な運動をしなければ、ならない」といった意味のことを主張し、また、農村運動の方式として「青年会、処女会、青年訓練所、農事改良実行組合などへ食いこむべきである」と主張したと記されている。(横井は戦前、戦後を通じ居村、海部郡立田村の農業問題に没頭、戦後の農地解放に全力を傾け、その死まで農事改良実行組合に尽力した。昭和三十五年十二月二日病死、五十一才。農青運動の実践者である。小島は健在。)

ニ、昭和六年二月下旬、星野・宮崎は大阪森小路にアジトを持ち、そこで田代儀三郎、大日方盛平と会い、農青社の同志となった。当時からは和佐田(後に上京、農青同志となる)、上野克己等と共に関西アナキスト連盟にいた。

ホ、昭和六年三月二十日夜、星野、宮崎は長野県上伊那郡南信日日新聞に加藤陸三を訪問したが、不在のため、印刷工宮嶋の案内で伊沢八十吉を訪問、徹夜で「農民に訴う」の趣旨につき談合、早晩、辞去した。

ヘ、昭和六年三月二十一日、すなわち、伊沢訪問の帰途、諏訪に松藤鉄三郎(注78)を訪問、同所で島津徳三郎、山田彰、増田貞二郎(注79)と会合、県下の製糸女工の惨状、近接村における電灯争議の漫延等窮迫した地方状況が報告されたが、かれ等は直接、農民ではなかったが、農村の外からの運動は困難であり、その運動方法について協議され、大門村の鷹野原長義の存在が紹介された。

(注78) 同志、松藤鉄三郎は、戦後全く消息を断ち生死不明である。

(注79) 同志、増田貞次郎は戦後まもなく病死した。

ト、昭和六年三月二十五日頃、鈴木靖之、小野長五郎は、神奈川郡高坐郡大野村に同志、草薙一郎(注80)、鈴木清一(注80)、外二名と会合した。

(注80) 草薙は地区機関誌「鉄」を発行、非常に活動的であったが、戦後、病死した。鈴木も病死した。

チ、昭和六年四月初旬、鈴木靖之は埼玉郡大宮町小作人社に木下茂、他二名を訪問した。なお、木下茂は昭和七年「黒旗」(大阪)創刊号で「農村青年」昭和六年十二月号の記事「我等はいかに歩んだ」を批判した、別掲。

リ、昭和六年四月、鈴木は前述の岡崎一夫、松倉小城(注81)、外一名を訪問した。

(注81) 消息全く不明。

リ、昭和六年四月、望月治郎は静岡市A思想研究会、同志、三上由三、石川金太郎(注82)外数名を訪問した。

(注82) 現在消息不明。

ヌ、昭和六年四月下旬から五月上旬にかけ星野、鈴木は、千葉、茨城の両県下に北島泰作、土屋公平、外十数名を訪問、農青社の成立事情等を説明。その際、水戸市外に愛郷塾頭、橘孝三郎を訪問、所説を交えた。

ル、望月治郎は、昭和六年七月十日頃から九月中旬に至る間、静岡、大阪、倉敷、福山、広島、別府、大分、白杵、岡山、姫路、清水等に沢田武雄外十数名を訪問した。

ル、昭和六年八月二十三日、八木秋子は長野県松本市大名町こと方に同志、島津徳三郎を訪問、同処で山田彰、伊沢八十吉、鷹野原長義と会合、地理区画の確立、並に地区責任者を決定し、「信州自連」の発行を決定した。

ヲ、昭和六年九月二十三日、八木は長野県上諏訪町にて同志、鷹野原、増田、松藤と会合し、八月二十三日の松本会合の内容を説明し、全員の承認をもとめた。

ワ、昭和六年十月二日頃から同月八日頃までの間、鈴木は、福島、栃木、埼玉各県下に同志、吉田多蔵、佐藤喜十郎、瓜生伝(注83)佐藤政男、石川主計、外十数名を訪問した。

(注83) 瓜生伝は戦後、昭和四十一年に病死。佐藤、瓜生、吉田の「冬の土」は昭和六年十月から昭和八年十月まで発行がつづけられた。

カ、昭和六年(1931)十月初旬、八木は鷹野原の依頼で、岩佐とともに同所、それから南沢の居村、南大井村でアナキズム講演会を行なうとともに直接連絡を行なった。

ヨ、昭和七年三月下旬、星野は、信州下諏訪「滝の湯」に於て、島津、松藤、増田と会合し、信州地理区画連合の機関紙「信州自連」発行の促進、信州におけるコンミュン確立の実践について協議をおこなった。

タ、昭和七年五月初旬、鈴木、舟木幾政は、山梨県下に同志、桜井一外四名を訪問した。

レ、昭和七年七月十日頃、鈴木、舟木幾政は、神奈川県下に草薙外数名を訪問した。

二 地方行脚と検挙

農青社の者が地方に行脚し、同志を訪問すれば、結局、いろいろと話が出よう。そしてそのうち、農青社の出版物がおくれ、通信が交わされるといった、友誼関係が生じることは怪しむに足りない。

しかし、吾々の農村青年社事件においては、長野県を別として（長野県では五十七名が検挙され、送検二十六名、十五名が起訴されたが）、これを除いて全国で、一道三府四十一県で、検挙者約三百数十名、起訴者二十一名（起訴者合計三十六名）を出すに至ったのである。

しかし、前記の、地方行脚で立寄ったさきの同志は、殆んどことごとく起訴された。しかも、その起訴理由は、革命遂行の秘密結社たる農村青年社へ、「加入」したということになって、治安維持法上の結社加入条項で起訴された。

この不条理について、吾々は、本書の第四章の第五項「農村青年社事件と結社加入問題について」の項で、詳述したが、第一に吾々は警察留置時代、刑務所時代を通じ、農青関係でかかる多数が、理由なき理由によって投獄されたということは、まったく知る由もなかった。しかも、その多くが地方行脚の関係者であったことは傷心に堪えない。さきに述べた津島の真野志岐夫の場合は、昭和十一年五月六日、早朝検挙され、警察の留置場に四十二日間おかれ農青運動に参加したという自白を強要され、しまいには「たとえ農青社に加入しないとしても、過去に東海黒連を結成し「黒色解放運動」を発行、責任者となっているのだから、そのほうでやってやると言われ、頑強に抵抗すればその方で調書にすると言われた。しかし、かれは妥協にも圧力にも屈せず、愛知県検事局で不起訴となった。

愛知県では同志、小野長五郎（注84）が、検挙された。しかし、かれの場合は農青社のメンバーであった。かれについては第九章愛知県の項で詳述する。

（注84）小野長五郎は昭和三十五年頃、重い肺患のまま、蒸発し、現在も行方不明である。

吾々は、多くの他の同志も、多かれ少なかれ、全く真野に加えられたような官憲の迫害をうけ、心ならずも権力に屈したケースが少なかつたのではないかと推測し傷心にたえない。

三 農村青年社出版物リスト

農青社から出版された出版物は三十三点で、これだけのものが昭和六年二月から昭和七年九月迄（1931—1932）一年半のあいだに出版された。なお、添田晋「農民に訴う」は本来黒色戦線社相沢、星野等の「黒旗」別冊として昭和六年二月に出版されたものだが、既述のように、農青イズムのひとつの基調となった主要なものであるので表に加えた。

また、農青社の傍系出版物である第三次黒色戦線（鈴木靖之、星野準二）はこの表に掲出したあとも農青解散後第七号（十月）が一

力重明、第八号（十二月号）が草村欽二によって出版されていることが、最近、星野の調査によって判明した。

しかし、農青関係としては、「黒色戦線」はこのリストに示したように昭和七年九月（第六号）までである。また、草村欽二の「黒色戦線」最終号後草村も応召し、帰還後病死したので当時の状況は不明である。

また「信州自由聯合」は、本来 自県内で発行する計画であったが、印刷所、署名人などの関係で、当面、農青社アドレスに信州自由聯合社をおき、署名人を農青社の望月秋幸として、原稿等は信州同志が自主的に協力、山田彰の編集で出版された。

なお、「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」は、予審終結決定書には証拠番号第46号の(8)として記載してあるにもかかわらず、何故か長野地裁、判決書の「農青出版物」には全く記載されていない。

農村青年社出版物

出版物名	発行年月	資料No.	種類・部数	発行趣旨	筆者	筆名	協同者	印刷種類	証換番号(予審)	備考
(1) 農民に訴う	昭和六年二月六日	(1)	有 A5 雑誌型五百部	農青運動の基調	宮崎 晃	添田 晋		活版	第三六号	「黒旗」別冊として発行
(2) 農村青年第一巻 第一号、三月号	昭和六年三月二十日		有 B5 リイフレ 機関紙	農村青年社	一面投稿 其他鈴木		星野、八木、望月、宮崎	活版	第三六号	
(3) 農村青年第一巻 第二号、四月号	昭和六年四月二十五日		有 B5 リイフレ	"	一面投稿 三面 南沢 其他 鈴木		"	"	第三六号	
(4) 農民の友第一巻 第一号、六月号	昭和六年六月二十日		有 A5 リイフレ	農村青年社 啓蒙紙	主として 鈴木 靖之		星野、八木、望月、田代	"	第四六号	
(5) 如何に為すべきか	昭和六年七月八日	(3)	有 B6 パンフレ	農村運動の運動方針書	鈴木の原文を改訂		小野、星野、宮崎、望月	"	第三六号	
(6) 最近運動の組織並に形態に就ての一提案	昭和六年八月一日	(9)	有 B5 パンフレ	結成主義の否定、自主行動の強調 自聯、黒聯の解散要求	宮崎 晃	無署名出版	星野、田代	ガリ	第四六号	パンと自由社との名で刊行

(7) 協同組合はいいか悪いか	昭和六年八月月中旬	(13)	有 菊判パンフレ	愛郷塾の「純粹経済主義」批判	宮崎 晃	無署名		ガリ	第三七号七	相互扶助社の名で刊行
(8) パンと自由	昭和六年八月二十九日		無 B6 リーフレ	アジプロ紙 都市労働者街に配布	宮崎 晃	無署名	八木、田代、宮崎	ガリ	第三六号十ノ二	
(9) 革命新聞 (第一号)	昭和六年八月下旬		無 B6 リーフレ	"	"	無署名	"	ガリ		
(10) 農民の友第一巻 第二号九月号	昭和六年九月月上旬		無 B6 リーフレ	農村青年社の啓蒙紙	主として 鈴木 靖之		星野、小野、八木、宮崎	活版	第四六号五	
(11) 革命新聞 (第二号)	昭和六年九月月上旬		無 B6 リーフレ	アジプロ紙 都市労働者街に配布	宮崎 晃	無署名	星野、平松、八木、宮崎	ガリ		
(12) 愛郷塾の再批判 (日本村治派同盟を排撃せよ)	昭和六年十一月二三日	(14)	有 B5 パンフレ	茨城県愛郷塾の再批判	鈴木 靖之		小野	ガリ		
(13) 全国情勢報告	昭和六年十一月中旬	(欠)	無 B5 パンフレ	農村運動全報告と批判	宮崎 晃	無署名	星野、八木、平松	ガリ	第四六号九	
(14) 吾国に於ける革命の完行に就て	昭和六年十二月初旬	(12)	無 B5 パンフレ	農青運動の隆起指針書	宮崎 晃	無署名	星野、八木、平松、和佐	ガリ	第四六号八	

(19) 給選挙に際して 青年諸君に訴う 昭和七年二 月二十日		(20) 農村青年第二卷 第五号、三月号 昭和七年三 月十三日		(21) 農村青年第二卷 第六号、五月号 昭和七年四 月二十日		(22) 信州自由聯合第 一卷第一号 昭和七年四 月二十日	
有		有		有		有	
B 5リーフレ ット三千部		B 5リーフレ ット二千部		B 5リーフレ ット千五百部		B 5リーフレ ット八百部	
総選挙排撃 告(二面)		全国地理の 直接連絡を 強行せよ (一面)		満州新国家 建設とは (四面)		信州農民の 進むべき道 (一面)	
八木 秋子		鈴木 靖之		鈴木 靖之		南沢袈裟松	
無署名		無署名		無署名		無署名	
星野、和佐 田、八木、 田代		星野、和佐 田、八木、 田代		星野、和佐 田、八木、 田代		編集山田、 島津、松藤 増田、伊沢 鷹野原	
活版		活版		活版		活版	
第四六号		第七号		第一八号		第三六号	
署名入望月		署名入望月		署名入望月		署名入望月	

15-C

(15) 農村青年第一卷 第三号、十二月 二月二三日		(16) 無政府主義研究 第一卷第一号 昭和七年一 月一日		(17) 黒色農民新聞 (農民の友)改題 昭和七年二 月一日		(18) 農村青年第二卷 第四号、二月号 昭和七年二 月一日	
有		有		有		有	
B 5リーフレ ット二千部		A 5雑誌、五 百部		B 4リーフレ ット五百部		B 5リーフレ ット千五百部	
農村に於ける 吾が同志 の任務(一 面)、一九三 一年に於ける 農青運動 の意義(二 ・三面)、運 動に於ける 二三の実践 的見解		アナキズム 運動に對する 実践的見 解 無政府主義 緒論		革命意識の 農民新聞 革命的單位 たる地理区 画を確立せ よ(一面)		革命意識の 農民新聞 革命的單位 たる地理区 画を確立せ よ(一面)	
宮崎 晃		南沢袈裟松		宮崎 晃		宮崎 晃	
無署名		藤代高雄		無署名		無署名	
和佐田、八 木、望月、 田代		編集星野、 八木、平松		編集八木、 星野、望月		編集星野、 和佐田、望 月、八木	
活版		活版		活版		活版	
第三六号		第三六号		第四六号		第七号	
署名入望月		署名入望月		署名入望月		署名入望月	

15-B

15-A

27 黑色戦線第二卷 第三号、四月号	昭和七年四 月一日	無	A 5 雑誌、千 五百部	(不明)	無政府主義 の組織と行 動に対する 一般概念	鈴木 靖之	編集星野、 鈴木 二二	活版 第一八号	山清が所有し ていることが 最近判明し た。
28 黑色戦線第二卷 第四号、五月号	昭和七年五 月一日	無	A 5 雑誌、千 五百部	(不明)			編集鈴木、 別所、草村 横田	活版 第一八号	
29 黑色戦線第二卷 第五号、六月号	昭和七年六 月一日	無	A 5 雑誌、千 五百部	(不明)			"	活版 第一八号	
30 日本無政府主義 運動史(第一分 冊第一編)	昭和七年五 月二十日	無	B 6 パンフレ ット千部	(不明)		鈴木 靖之		活版 第一八号	
31 日本無政府主義 運動史(第一分 冊第二編)	昭和七年六 月十五日	有	B 6 パンフレ ット千部	アナキスト の史観		鈴木 靖之	編集鈴木、 舟木、草村 別所、本田 横田	活版 第一八号	「アナキズム 史観」ではな い。
32 黑色戦線第二卷 第六号、七月号	昭和七年七 月二十日	無	A 5 雑誌、千 部	(不明)				活版 第一八号	
33 黑色戦線第二卷 第七号、九月号	昭和七年九 月一日	無	A 5 雑誌、千 部	(不明)			"	活版 第一八号	昭和七年九月 二十七日 農青社解散

23 信州自由聯合第 一卷第二号	昭和七年六 月二十日	無	B 5 リーフレ ット八百部	製絲女工に 訴う(第四 面)	人間の生活 に貨幣は必 要か(二面) 県下の自主 青年に訴う (三面)	伊沢八十吉 "	無・名	第三六号	
24 無政府主義研究 第一卷第二号	昭和七年九 月一日	無	A 5 雑誌、五 百部	(不明)		彰 無署名	編集山田、 島津、松藤 増田、伊沢 鷹野原	活版 三一ノ一	
25 黑色戦線第一卷 第一号、九月号	昭和六年九 月一日	有	A 5 雑誌、千 部	無政府主義 文学の現実 と理想		鈴木 靖之	編集星野、 鈴木 二二	活版 第一八号	
26 黑色戦線第二卷 第二号、一月号	昭和七年一 月一日	有	A 5 雑誌、千 部	無政府主義 の可能のた めに ソヴエトロ シア五か年 計画の曝露		宮崎 晃 松尾伍之 助 鈴木	編集星野、 鈴木 二二	活版 第一八号	(黑色戦線は 一号から七号 迄、全冊、秋

農村青年社の出版活動に関する地裁判決書の記述は、勿論、細部にわたればいろいろの過誤をふくんでいるが、特に「最近運動の組織に関する一提案」を省略したことは、おどろくべきことでこの存在は裁判所の「農青結社立証」に対する邪魔な資料である。

これは「予審調書中」には、農青社出版物表のなかに摂取し、このパンフ発行については「被告望月治郎は関与せざる旨この時、望月は九州行脚中」とまで明示しておる。

また、前掲の「館林手記」においては、「宮崎は農村青年社に對立する個人テロの団体を有害無益と考え、その解体を欲してやまなかつたので、昭和六年八月十日、星野等と合議して、自ら執筆し、大正十五年から全国の統一団体であつた黒聯、自聯の解体を要求するパンフレット「最近運動における組織並に形態についての一提案」を発行し、「パンと自由社」の名で配布した」と記述している。「最近運動の組織についての一提案」の内容が、對立する個人テロの団体や、黒聯、自聯の解散をのみ要求したものでないことは、本書の第四章、内部暴力の発生と、黒聯、自聯の解散を要求した農青の「最近運動の組織並に形態に就ての一提案」資料を一読すれば、そのような對立抗争意識ではなく、正しいアナキズム組織論を要求したものなることは明白である。

而して、その根底である結成主義の否定は、農村青年社を全国的秘密結社と規定するには不合理な資料となる為に地裁判決書の「農村青年社出版物」中から除去したのであらう。

なお、「無政府主義研究」（後掲、資料16）も、予審決定書には、押収物件中にあり、証拠番号を付して農青出版物中に掲出されているが、地裁判決書からは除外されている。

これも「館林手記」によれば、「当時、共產主義陣營の「マルキシズム研究」、「マルキシズムの旗のもとに」等と同水準の理論誌「無政府主義研究」が、鈴木靖之を主宰として発刊され、このなかに自治民約、農村運動の哲学などかれの畢生の主著の一部が掲載されていた、云々」ということになっている。しかし、これも出たら目星野、宮崎が合議し、運動上の必要から、

一、実践理論の検討 一、國際戦線の紹介 一、マルクス主義への闘争

の三目的をかけた、昭和七年一月（1932）に創刊したもので、創刊号の扉にも、

一、無政府主義運動の革命的発展に對する戦術上の実践理論に關する検討

一、無政府主義理論体系の確立及マルクス主義に對する理論闘争

と、目的を明示してある。非合法グループの検挙後、同誌第二号が出ているが、現存する資料もなく内容は不明である。

しかし、「無政府主義研究」創刊号は現存、その掲載論文は資料（16）として掲出した。

また、昭和六年七月八日刊の「協同組合はいいか悪いか」は、多分、鈴木、星野が茨城愛郷塾の橋孝三郎を地方行脚の際立寄ったことから、同塾の關係者であつた山川時郎と宮崎とのあいだに書信や「農業研究」等の往復があり、かれらの主張する「純粹經濟主義」に對する吾々（宮崎）の批判をまとめて出版したもので、十一月に刊行された鈴木木の「日本村治派同盟を抹殺せよ」とは關係はない。

次に、「農民の友」（一般農村に對する啓蒙紙）は、昭和六年九月に第二号が出たが、このような従来の形成をそのまま踏襲したかたちの啓蒙紙は、地理区画の樹立を目標とする全村運動に援用するには有益でないことが批判され、ニュース性の内容をもつ農民新聞に変更すべきであるということになり、「黒色農民新聞」（署名人、望月治郎）と改題し、昭和七年（1932）二月に改題後の第一号が出たが、前掲のように四月三日、望月、八木、和佐田、星野が逮捕され、四月二十日発行の「農村青年」（第二卷第六号、五月号）の編集後記（鈴木靖之）で「農民の友」改題「黒色農民新聞」は現在における運動上、厳正なる批判のもとに廃刊した旨の内部批判が告知され、それだけでなく農青機関紙「農村青年」そのものも、この五月号が最後で、農青運動に直接連関のある出版物は「信州自由聯合」も七月号を以て停止された。

「黒色戦線」は、相沢、星野等の第二次黒色戦線「黒旗」とは全く關聯なく、鈴木、星野が中心となり、草村欽二、吉田伸、別所孝三、横山実、本田京三等が加わり、創刊号は昭和六年九月、第二卷第二号が昭和七年一月、二号が四月、それ以降は星野は検挙され、結局、昭和七年九月六号を以て、鈴木も同誌から退いたが、前記のように一力、草村等によって第八号まで発刊された。発刊事情から本誌は農青運の側面誌と見られ、また茲に名をあげた草村、吉田、別所はのちに検挙、農青關係として起訴されている。

「黒色戦線」誌は第一号、第二卷第一号は発見されたが他の号は発見されなかったところが、極めて最近、全巻が秋山清によって蔵書されていることが判明したがリストには吸収し得なかった。

以下に既に掲出したもの以外の農青出版物をかける。